琉球大学学術リポジトリ

「影絵芝居の話」観光叢書第10輯

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2018-04-16
	キーワード (Ja): 矢内原忠雄
	キーワード (En): Yanaihara Tadao
	作成者: -
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/37916

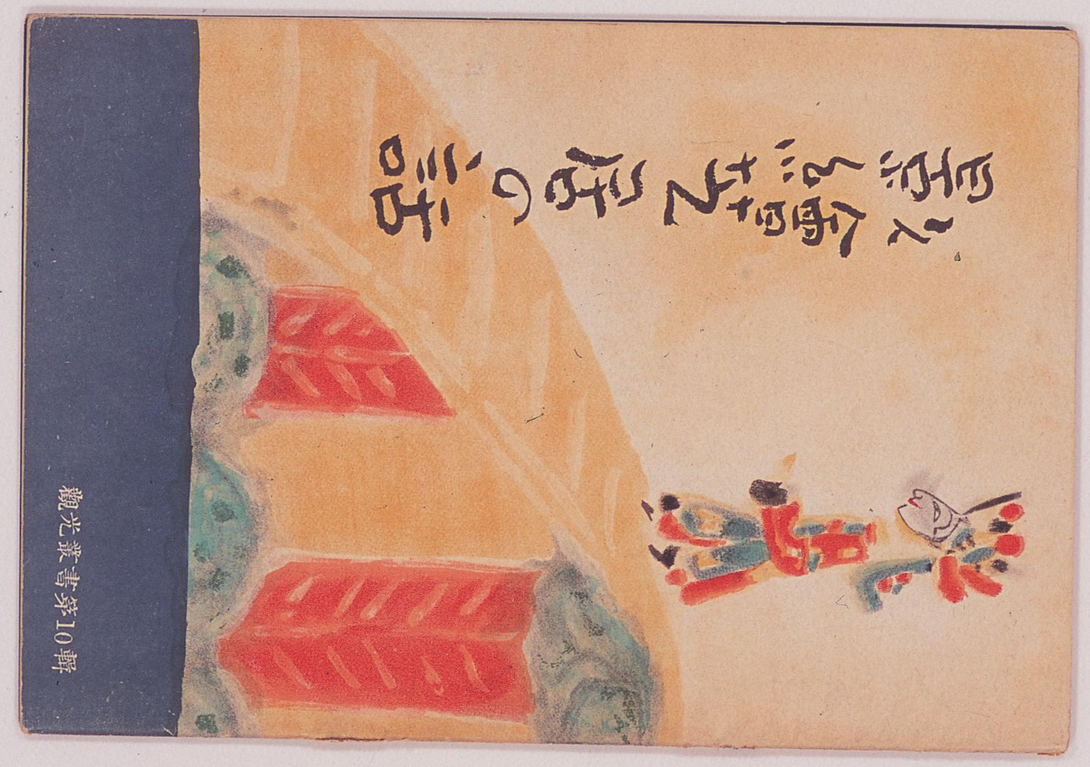
矢内原忠雄文庫

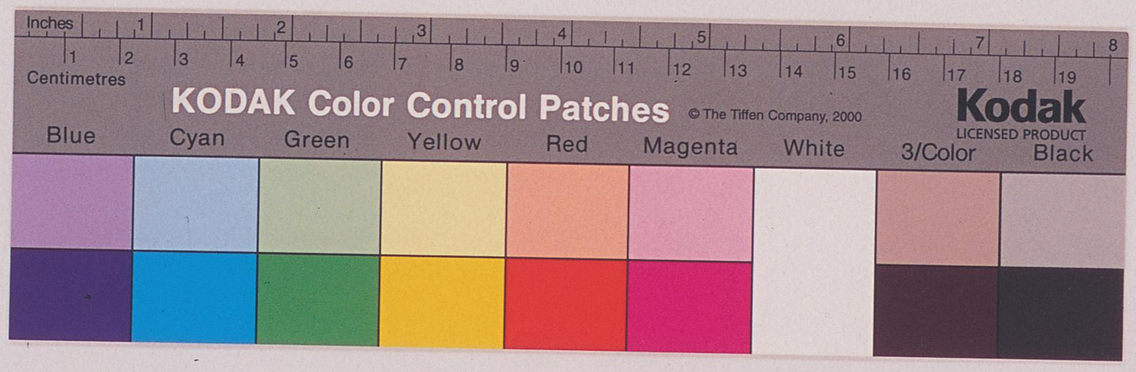
史　料　名	昭和十五年四月「影絵芝居の話」観光叢書第10輯
封筒番号	393
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 18 日
撮　影　者	富士写真フイルム　株式会社
備　　考	

矢内原忠雄文庫

封筒番号： 393

史料名	昭和十五年四月「影絵芝居の話」觀光叢書第10輯
資料形態	四六判冊子
枚　数	16
頁　数	32
縦（cm）	
横（cm）	
厚さ(cm)	
書誌的事項	満洲 今泉分類記号： P

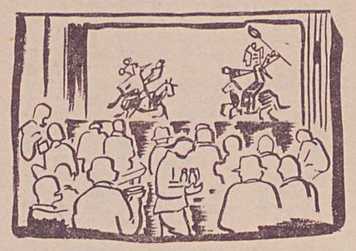

観光葉書袋10枚
霧の中に浮かぶ湖


Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black

1/10

影繪芝居の話

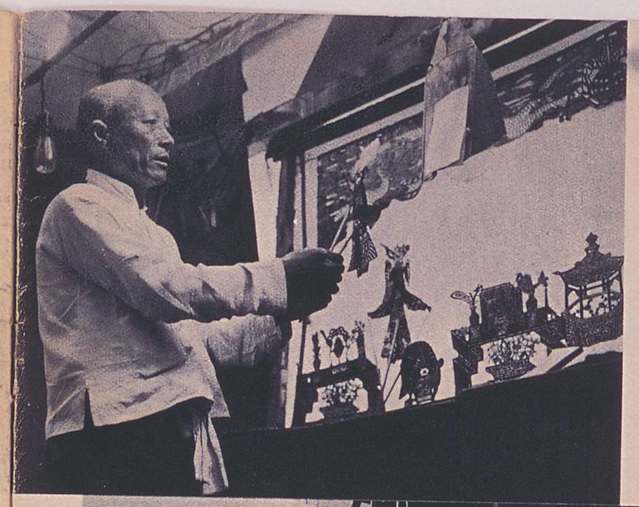
觀光叢書第10輯



目次

影繪芝居の話……三
諸國の影繪……六
影繪の起り……八
樂屋及用具……一〇
演　技……一二
樂　器……一三
照　明……一五
人形及特徴……一六
脊景、大道具、小道具……一九
人形の造り方……二〇
座員の生活狀態……二一
どんな所で演られるか……二三
影繪の盛んな地方……二四
影繪の將來……二五
附、影繪人形玩具……二七

影繪芝居の樂屋



はしがき

世界いづこの國でも、演劇のない國はない。その演劇程、廣範圍ではないが、演劇よりも更に古く、演劇の前身とも言はれるものに人形芝居がある。人形芝居に、糸操り人形、指操り人形、影繪操り人形の三種ある中、影繪芝居のことであるが、滿洲のは非常に勝れ歴史的にも古く、その古典的な香り、獨得な動き、絢爛豪華さ共に世界代表的とされ、一部の趣味家から非常に高く評價されてゐるのである、だが今は全く時代に取殘され、知られぬまゝに滅びゆくその哀愁切々たる古典藝術に接しる時、唱片に、音樂に、動きに、誰しも目頭を熱くし陶然とせぬものはあるまいと思ふ。

これは全く、日本の「文樂」に匹敵する好個のもので、滿洲旅行者は是非一夕の觀賞をおすゝめすると同時に、滅びゆく古典藝術、土民藝術「影繪芝居」を廣く宣傳して戴きたいと思ふ。

影繪芝居の話

影繪の名稱は地方によつて違ふ。

滿洲では「驢皮影兒」或は「影戲」と呼ぶが同じ滿洲でも錦州邊りでは「唱影」、熱河では「唱戲的」と呼ぶ。北支になると灤州では「照像」、冀縣では「顯影」、寶砥縣では「廂影」などゝ言ふ。

影繪芝居とは一體どんなものか。一口に言へば獸皮を薄く削り、之を刻み彩色した人形に脊後から光を通しスクリーンに寫出し、唱や音樂に合はせて踊らせるのである。

これのやられるのは、野外の場合と屋内の場合とがある。元來農民の支持で傳えられた農民藝術で、農閑期を利用して野外で演じられるものにこそ本來のものがある。

夏の日の落ちかゝる頃、村落の空地に簡單な丸太を四本立て、上下に横木を張り、之に板を渡して二疊敷程の床を作り、三方紺布を圍らし一方高さ三尺、横六尺程のスクリーンを張る。之で舞台及樂屋が出來た譯である。この樂屋で劇に入る前、スクリーンいつぱいに脊景、大道具等を飾りたて、賑やかに一曲囃したてるのがきまりである。この頃には、村の老若男女がてんでに手製な腰掛けを持ち、びつしりとつめかける。スクリーンの下あたり小孩兒（小供）の頭が芋の子の樣につまつてる。後の方では、一廉の影繪通振つた老人が、いゝ氣持で講釋を一席ふりまいた口で長きせるにのんびりと輪を吹かす。

油燈に火が點じられる。その時代調を帶びた紙のスクリーンに、五本の火口から炎上げる焰が赤黒く、スクリーンいっぱいにメラメラと大きくゆらぎ、恐らく繪の大家でもなし難い樣な素晴しい古代色をおしげもなく滲ませると、古典的な音樂につれて、この光を受けた眞樣な人形の登場を待て、こゝに影繪芝居の遥い二千年の夢がくりひろげられるのである。

スクリーンに机が並び、椅子が置かれる。勿論之も人形と同じ獸皮に彩色した美しいものである。人形は、胴と腰に圍帛があり、その腰を折つて椅子にかけ生けるが如くに顫顫をしゝくには、誰しも思はず苦笑させられる。更に酒を汲み合ひはては酩酊する樣や、手ひ惡惡の絡り胸をふくらませ息をはずませる細かい仕草や、高足踊り、馬上の劇戯、或は王を迫ひ荒れ狂ふ臙子の樣等、到底皮ッぺらとは思えぬ立體感と生物感とを表現するには全く舌を卷かせられる。

「大香山」と云ふ劇がある。之は千手千眼佛及び佛手柑の由來記であるが、唐時代の個邦莊王が病にかゝり、これを癒すには大香山に出家修業してゐる王の三女の目と手をとつてくればよいと云ふ醫師の言により、使者を派してとらせる。後、病は癒えるがその非道を悔ひ三皇姑を千手千眼佛に封じると言ふ筋で、王が大香山に三皇姑を訪れるくだりは、影繪の絢爛豪華の代表的なものと云ふべく、その行列はスクリーンの右から左に順次に移動させるだけで、實に三十分を要する。その登場人物に至つては何百と云ふ數にならうが、同一のものは一つもない。殊に牛車に至つてはその細欄目を奪ふ許りで、しかも輦は廻轉する仕組にまでなつてゐる。

更にこの大香山の三皇姑を千手千眼佛に封じるくだりは異色あるもので、一瞬場面は眞暗になり異樣な音樂に

つれて、にぶい光に妖靈は亂れ乘び畫面一ぱいに荒れ狂ひ、慘怪な氣運を漲らせる中、佛陀の像がほのかに浮ぶと瞬間、再び元の明るさにかえり、如々たる音樂と共に、千手千眼佛に化した三皇姑がクッキリと浮き上ると云ふ、淡影濃影を活した妖靈その他は、工夫された影繪獨自の美しさを强調したものである。

影繪も支那芝居と同じで、幽戯で唱を聽く方に可成り眞をおき、從つて眼ひ手の勝れたものが多い。影繪の笛は支那芝居の笛とも違ひ、更に遠い淋しいものを感じさせられる。

ついでながら大香山に例を引くが、父の命なればと意を決し、使者にその意中を訴え唱ふその物悲しい切々たる音律は、何かしら遠い千年も二千年もの昔に引つり込まれる樣な、全く夢を感じる。あえてこの境地に浮游させられるのは聞くものの許りでなく、唱ひ奏でるものも共にこの境地にひたり、目を細め、首を振り陶然と唱ひ奏でる樣は胸を打たれるものがある。人形遣ひとてもさうで、五體を全く人間の如くに踊らせくねらせ、はては片足かついで走り出すと言ふ樣な項目などを見せる時、人形を踊らせる以上に自分も踊り、氣合をかけ聲をもらし、はてはトントントン足拍子をとり、全く樂しみ陶ふが如くで共に尊い藝術の境地であると思ふ。

こゝでは、大香山を多く引例したが、勿論前述のことは大香山に限つたものではない。かしら大香山は影繪の驚異を示した部類で、更に影繪人形の動きを多くみせた劇、或は動きを少く唱を多く聞かせる劇等もあり、大兜子、大蒙子の三枚目が出ておどけ數らすユーモラスな劇もある。

劇を大別すると文戯、武戯、滑稽劇に分れ、この點支那芝居の場合と同じで、文戯は世話物で唱の多い耳を樂しませる劇であるが、武戯になると動きの多い劍戟物、滑稽劇は動きも多くおどけた唱もはいり賑やかな劇で

ある。

文戲に「五峰會」、武戲に「黄巢叛亂」、滑稽劇に「保龍山」等がある。

この外、文武をつきまぜた劇も少くない。

筋書きは多く支那芝居によるものだが、影繪獨自のものもあり「大香山」はその一つである。又「青雲鐵」の如く支那芝居としてはすたり、影繪にのみ殘された劇もある。

筋は多く傳說、稗史小說によるものであるが、前述の「大香山」、「黄巢叛亂」は傳說、稗史小說の部に屬するものである。

劇には連續物が多く、寄席では毎夜替りで演じられてゐるが、長いものになると「封神榜」の如く四ヶ月も續くものがある。

影繪の代表的と云へば河北灤州樂亭影であるが、こゝには名のある一座は十五、六もあり、多く北京、滿洲に出て活躍してゐる。その中、滿洲へ來てゐる名のある一座は、長繩武、洪國昌、劉義三、曹輔權で、殊に長繩武、洪國昌の美聲はレコードに吹込まれてゐる。

さて、部分について少しく詳しく述べてみやう。

諸國の影繪

滿洲影繪の起りを書く前に、それに連關する諸國の影繪を極く簡單に記して置く。

影繪の國に、東は日本、滿洲、支那を始め、南東アジアでは、ジヤバ、シヤム。南西アジアではトルコ、ペルシヤ、アラビヤ。アフリカではエジプト、トリポリ、モロッコ。歐羅巴ではドイツ、フランス等で代表的なのは、滿洲支那及ジヤバ、トルコが擧げられる。

その一番古いとされてゐるのが支那で、漢の武帝の時代と云ふから西歷紀元前一四〇年になる。次がジヤバのワヤンで紀元七十年頃には、立派に存在したと言ふ說がジヤバ文獻カヴイ文書なるものにのつてゐると云ふ。更に、十一世紀中葉に書かれたアルジュナ、ウイワハ詩篇に「皮を切り拔ける人形なるに關らず、これを見るものは悲しみて叫號するものあり」と。こゝでは全くハツキリしてゐる。

次にトルコのカラギヨーズで、これは十五世紀ブルサに生れた一人のコーモリスト、カラギヨーズが演じた劇及所作を後世人が之を影繪に移し、今日に傳えたと云ふ。その影繪はアラビヤに起りトルコに傳えられたもので、アフリカのエヂプト、トリポリ、モロッコはほゞ同系統とされてゐる。

更に下つて十六世紀末期にドイツで影繪芝居が問題になつてゐる。フランスではパリーで可成り古くから行はれてゐたと云はれてゐるが判然とした處では十七世紀後半にヴエルサイユにドミニツク、セラフアンなるものが影繪小屋を建て、成功してパリーに乘出し遂には玉室の保護を受けたとあるから相當のものである。ドイツでも此頃、テイフルトに影繪劇場が建ち、伯林に同劇場が建てられる十八世紀前半迄全盛を極めたとある。更にドイツでは、後年シルエット映畫として發展した。

最後に日本であるが、明治十年文樂人形の發祥地阿波に發生した。創案者は阿波人形遣ひ吉田春之助で餘り世に知られぬ中に廢滅した樣である。

人形の材料は、日本では紙や布を用ひ、滿洲支那では牛皮、羊皮、驢馬皮、ジャバでは水牛皮又は羊皮、トルコでは駱駝皮で、いづれも手足に關節をつけ柄をすげ、滿洲支那を除く外は、下から差上げて人形を踊らせるのを普通とする。

晉樂、歌に合はせて人形を踊らせる事や、布又は紙のスクリーンを用ひること及劇の內容は單に神話、傳說、歷史に取材し、その起原はいづれも宗教的な處から發生してゐる點等は、相通ずる共通點である。

影繪の起り

滿洲影繪の起原說で一番古いのは、漢の武帝の時代（西紀前百四十年）で、その武帝が逝ける季夫人の影を慕ひ、布帳に紙を刻んだ影を寫したのに始まると云ふのだが、この說が一番ロマンチックで美しい。次に古い處では唐の太宗（西紀六百二十七年）が、陰に遊び日に遊ぶと云ふから、地獄極樂に遊び娑婆にもどると供養の爲、五晉六律によつて晉樂を編成し影繪を踊らせたとある。下つて淸の名人がその唐の太宗の踊らせた影繪を發展させ劇を織り、忠臣孝子義夫節婦の敎を說き各地に廣めたと。これは樂亭人の語る處で、樂亭ではこうした言ひ傳えがある。

更に、明の萬曆年間（十五世紀後半）に、灤州の黃素志なる人が譯あつて國を賣り、瀋陽（奉天）に逃がれ生活の餘業として始めたと言ふ說。

同じく明の末葉に灤州の人曹振中が、遼陽にあつて世の頹廢を歎き影繪を講談に配し、又は木魚を敲いて唱ひ、後年これに種々の樂器を配し今日に至つたと言ふ說。この二つの說は、時代、地理その他に類似の點多く、黃素志の場合も木魚を敲いて唱ひ、後世諸樂器を得て今日の體をなしたと云ふから益々接近し、何かしらその時代に於ける影繪の動きの暗示を感じる。

更にもう一つ、許地山の說と云ふのがある。それは印度からビルマ、ジャバ、シャムを經て北宋（九世紀）に傳はり南宋（十世紀）に榮えたと。この說になると、滿洲或は支那の創始でなく輸入と言ふことになる。この說の興味深いことは事實、印度、ビルマ、ジャバ、シャムに影繪の現存することゝ、回敎と連關をもち、トルコ、アフリカ一體の影繪はアラビヤに起つた影繪が回敎に附いて傳えられたと云ふこの事實である。このことは、これ以外の回敎諸國にも傳えられる事は考へられる。回敎國インド、ペルシヤ、トルコ、アフリカ、ジャバ、シャム、支那と考へてくると回敎との連關をもつて輸入されたことも考へられる。

これは回敎の宣傳に影繪を使用したのではなく、回敎そのものが貿易の副產物として傳えられた樣に、影繪も回敎の副產物として弘められたのである。

支那に回敎のはいつたのが唐の太宗の時で、之は陸路から傳はり非常に大きな影響を與えたとあり、太宗と回敎については可成り史實的な言ひ傳えもある。これが六世紀で、八世紀には海路から貿易商であり回敎徒である

アラビヤ人が、廣東、泉州、福州、寧波、杭州、乍浦等で通商を營むと云ふから、當然回教もこの地に弘まつた譯である。南影は大體この方向に辿えたし、トルコ、ジヤバの人形との非常な共通性が、單に必要性による一致、遇然の一致とは片付けられぬものがあり、このことは輸入說に可成り力を付けるのではあるが、然し影繪もそのまゝ回教について弘まつたとはまだ云ひ切れない。

現に、許地山の言を否定する樣な說が、ジヤバワヤンの研究家によつて可成り確實性をもつて發表されてゐる。それはジヤバの影繪はビルマには傳えたが、ジヤバのは印度からも支那からも傳られたものでなく、純然たるジヤバの創始になるものであると力說してゐる。

こうした問題は研究者の今後に殘された課題ではあるが、宋時代に影繪の流行したことは他の書物にもみえて居り、唐の太宗の創始說と、太宗と回教との連關、或は下つて明時代の二つの說、共に同時代にいくつかの引つかゝりを生じた時、そこに「何か」の暗示を思はずには居られない。

いづれにせよ幾多の起伏を經て傳られたものであらふが、今日の影繪の體をなしたのはやはり清朝以後のものであることだけは考へられる。この期に、影繪のもつ內容が文化水準の低い滿洲農民の意氣とシツクリ合ひ、そこに大きな支持を得、全國に傳播すると共に發展し今日の影繪に完成された譯である。

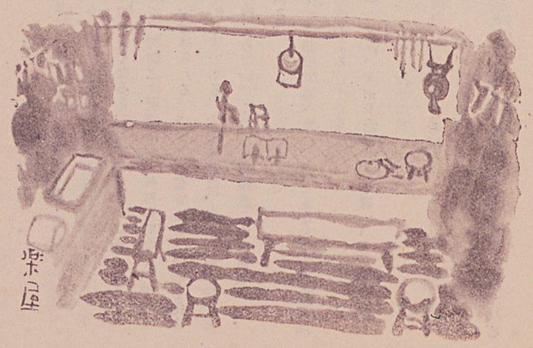
樂屋及用具

樂屋は二疊ぐらいの板敷で、七人の演技員が、肩をすり合して、踊らせ唱ひ奏でる。

スクリーンの下に、スクリーンと同じ幅の横長の臺があり、之に網或は毛布を敷く。これは人形のさゝえ棒がすべらぬ爲の止めである。

更にこの臺には、出をまつ人形が置かれ、影戯譜や樂器の一部が置かれる。影戯譜は臺詞や唱の臺本である。スクリーンの上部及左右上部には綱を張り、それに人形を雀の樣に下げる。左右兩壁には紺布を張りめぐらし、光線の遮斷と樂屋の仕切りと二つの役目をさせてゐる。班によつては、やはり紺のいくつかの小袋を持つた布が掛けられてある。この小袋に、小道具を差入れておく。人形は上に下げる以外に必要の一部を入れる籠又は箱が、左側に置かれる。床には座員の掛ける椅子が雜然と散らばつてゐる。

この狹さの中で、九種の細高い樂器を鳴らし唱ふには全く、耳が裂ける許りである。



演　　技

演技員は普通七名、人形を遣ふのは大概一人であるが、登場人物が多くなると二人でやる。更に多くなると、人形を解体だて、次から次へと手渡しする準備員も出てくるのだが、勿論之は別個におかれるのでなく、手の空いたものが間時やるので、幾座における一切合切は七名によつて片付けられる。つまり、奏でる者も人形を遣ふものも、寄詞もはけば歌も唱ふ、その他もやると言ふ戯場の様な忙しさである。大體寄詞は、各自持場が決つてゐて、寄本を見ながら受け渡しをする。従つて文字が讀めないと務まらない。この風は東南派（河北寶坻）で、西派（琢州）になると寄本によらず口傳を重んじるとのことである。

人形遣ひが、人形を開らせる以上に自分も開らると云ふことに付ては前項で述べたが、夏ともなれば木綿布に囲まれたこの狭い幾座は光りの幾氣を加へ、全く息つまる蒸風呂の感がある。

處が、幕ひな事には客席からは内部は見えぬので、馬の腹掛一つとか、ズボンだけとか半裸で、その暑さも苦にせぬ如くに颯然とやつてゐる。

剛高い造り聲を出すには、喉佛に手を當てゝ絞り出すなどは面白い。動物などの場合もこんな方法で造り聲を出す。

之等の演技は、非常に技術を要することは日本の文樂のそれと同じで、十六、七前後の少年期から訓練される

のである。試みに樂亭影の某一座の座員、座長含めて八名の年齢及この道に手を染めた年齢を列記してみやう。

座長	始めた年齢	以來現在迄の歳月	現在年齢
A	二十歳	三十年	五十歳
B	十四歳	三十年	四十四歳
C	十八歳	二十年	三十八歳
D	十五歳	二十年	三十五歳
E	二十一歳	五年	二十六歳
F	十五歳	十年	二十五歳
G	十八歳	五年	二十三歳

なほ座長は三代目である。

樂　　器

最初は、木魚が唯一の人形を開らせる樂器であつたのが、次第に發達し、現在の約九種が一般的である。その内容は、大鈸、小鈸、南鈸子、銅笛、胡琴、大鼓、大鑼、皮鑼、鬧板兒で、之は滿洲だけと思ふが洋琴等の加つたのがある。

○影繪劇○

黄巣叛亂

唐の僖宗帝の頃、秘かに帝位を覗ふ梟雄―黄巣の勢力は遙かに帝王を凌ぐものがあり、日夜彼の館では帝位簒奪の謀議が重ねられてゐた。

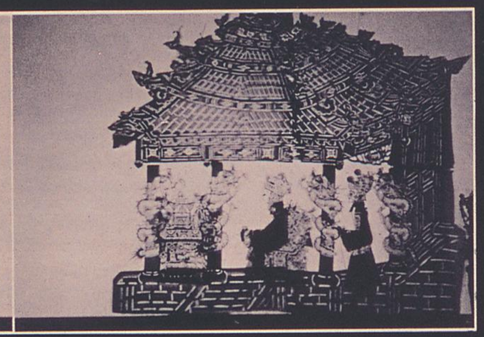
大鉦、小鉦は、皿の様な眞鍮製の金屬を打合はせ音を出す樂器で、大の方はその頭部に持ち易い様に赤布が付けてあ。南絃子は三味線の一種、大羅は謂ゆるドラで、横笛は日本のそれと大差なく、胡琴は胡弓、皮羅は中央に突起のある珍らしい太鼓で、音も響きの少い特殊な樂器である。

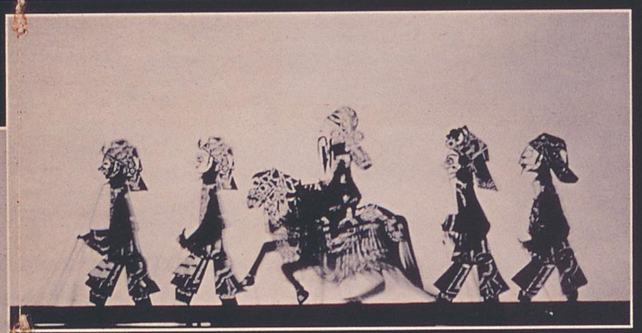
・顯板兒は竹製の打板で、竹片を片手で打合せ高い音を出す。

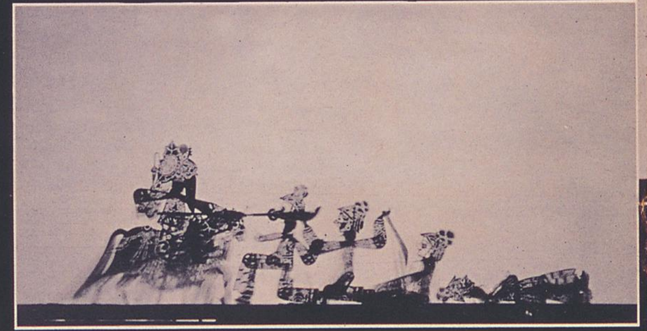
洋琴は細い針金の糸を張り、これを打つ棒は竹の皮を細くはぎ、尖端に僅かその幹を殘したものでこれを二本使用し、丁度木琴の様にたゝくのである。

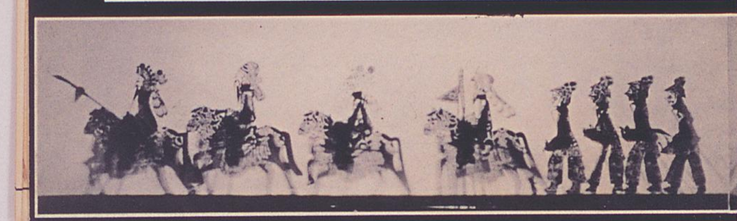
帝の親任厚き時の宰相―田令之は黄巣に通謀してゐる逆臣であつたが、事態の緊迫を口實に巧言麗色ひたすらに遷都を勸めた。

僖宗帝遷都の好機を狙つて邀撃に出た叛軍黄巣の將―宗温等は、先づ唐軍の武將劉建忠をその血祭りに上げ、捷ち誇つた餘勢を驅つて唐軍を難なく撃破して入洛し、帝は遠く西岐良美に蒙塵した。そこで帝は故あつて流罪に處してゐる舊臣李克用が今は時めく沙陀國王であることを想起し、彼の援軍を求めるべく大臣程敬思を遣ひせしめた。李克用は皇族弑殺の大逆を、同臣程敬思の執りなしと唐朝に於ける勳功に免じて死一等を減ぜられた者であるから、助命の恩人程敬思の再々懇願に遂に心動かされ、李王は自らも八十一斤の寶刀を提げ十三人の武勇の譽れ高い王子をそれ〳〵將とする義軍十五萬を繰り出し、向ふところ叛軍を撃破して破竹の進軍を續けた。

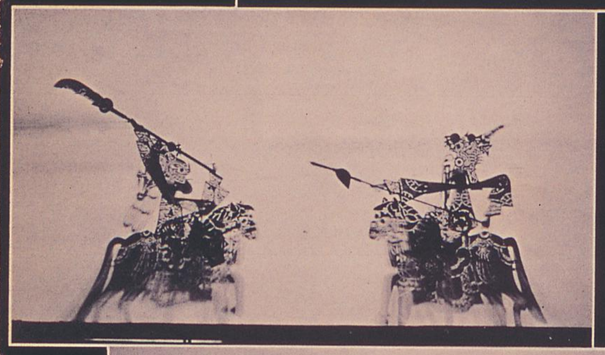








李王の第一王子李嗣源は最も義にも厚く信望も高い總帥であるが、遂に賊將黄巢を追ひつめて自刎せしめ、撥亂反正の偉業をこゝに目出たく完成した。



照明

照明は、屋外では油燈、屋内では電燈を用ひる。油燈は畫面に非常に面白い動きを見せるが何分にも油煙がひどく、屋内では到底不可能である。屋外でも、燈の上部に煙筒をつけ、油煙を屋外に逃がす樣になつてゐるが、それでも人形はすゝけて眞黒になり、黒一色の樣にみえるがさてスクリーンに立て光を通すと、立派に色彩は蘇える。

油燈は扇形で五本の筒形の火口をもち、鎖でつる。油は豆油を用ひる。

電氣の場合は、多く百燭光一つで、位置はスクリーンを離すこと一尺、左右から計つて眞中、上下では上から四分、下から六分、これが下過ぎたり上過ぎたり左右に偏すると、演者の手か寫つたり、影が縮んだり思はしくない。

十燭光三つぐらいの所もあるが、この場合も下から六分の位置にかためずに同間隔に離して竝べる。

人形及特徴

人形は、獸皮を刻んだものを黑、赤、青の三色で彩色したものであるが、中には更に茶を一色加えたものがある。

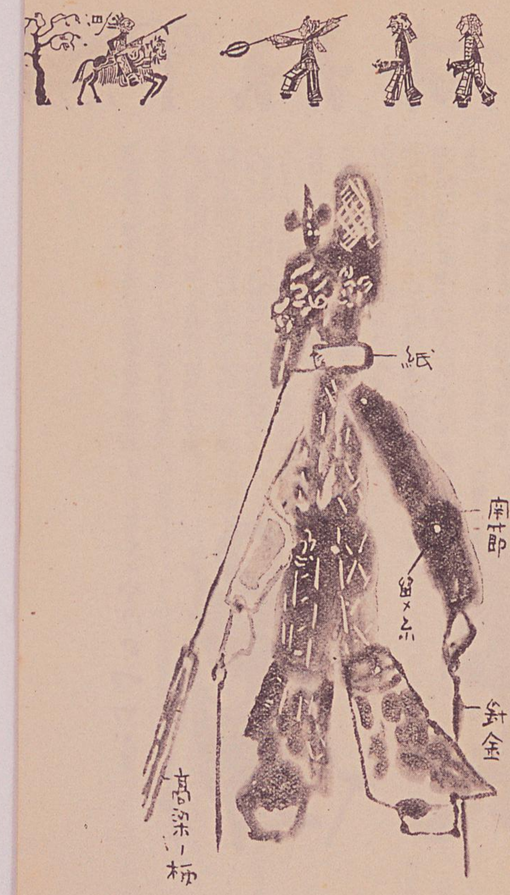
人形は、首、胴、腰、足、二の腕、腕、手首からなり、之を各所糸で止め、手、足、腰共に折曲げられる仕組になつてゐる。首だけは隨時差換えのきく樣、紙でその用意がなされてゐる。更に、兩手、喉の三ヶ所に針金をつけ、その先に高粱の柄をすげたものである。これは原則で役の必要に應じて變形したり關節を増したりする。

兎も角、これだけのものが、人形遣ひの手に觸れると喜怒哀樂の表情を五體にみなぎらせて、影は獨得の動きをみせる。

人形の身長は、八・九寸、これに針金、柄の長さが八寸程で、總て扮裝の型は支那芝居と同じで、顏の隈取りで善惡を分け、冠の裝飾などで武將、文官の區別をしたものであるが、その獨得な持味は無類で、近年滿洲と云はず日本內地の出版物の表紙等に頻繁に用ひられてゐる。

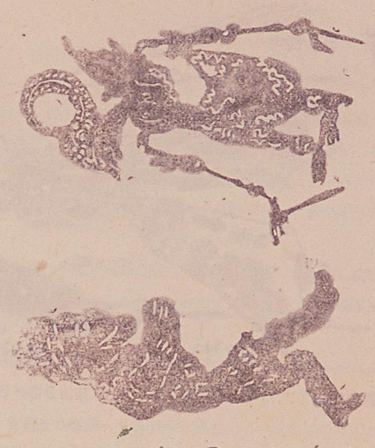
影繪人形は、側面と云ふのが原則で、これはいづこの國の影繪でも共通的な點である。但し斜面を用ひたものに三枚目がある。

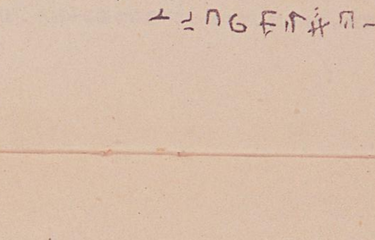
三枚目には、大禿子、大掌子があるが、これとて一般的には側面で、斜面は可成珍しいものである。之は、樂亭影の一部に限られてゐる。



面白いことにはどうしたものか、馬だけは必ず斜面で、大掌子の場合は顏だけであるが、馬の場合は全體にやゝそんな感じをもたせ、停止してゐる時でも足を四本みせてゐる。

大掌子は三枚目だけに非常に誇張され、頭部は普通のものの三倍はある。しかも片手だけで、その手は頭部より





更に大きい處から大寧子の名がある。頭に冠子をかぶつたものと、しからざるものとあり、鼎の上着に赤いズボンをはき、巨大な手を振りながら出てくると子供までがゲラ〳〵と笑ひ出すのである。大寧子で面に砂利袋のあるのはそれと云はず大寧子と云ふ。服裝はほゞ同樣で、いづれかゞ用ひられる。とんと支那芝居の型による影繪もこの大寧子、大寧子だけは全く影繪獨自のものである。更に次の絵面を見せたのがあるが之も滑稽的な存在で、頭部は大寧子より幾分小さいくらいのものである。

この滿洲の影繪を外國の代表的な影繪人形、トルコカラギヨーズ及ジャバのワヤンと比較すると、その形の上からの美しさは、やはり滿洲のが勝れてゐるのではないかと思ふ。

ワヤンは非常に刻みが細かく、古典味もありそのグロさも獨得のものであるが、頭部、胴に對して手が非常に長く、又足は極端に小さく不安定であり、曲線の複雜さは餘り鋭いものを感じない。

カラギヨーズは、刻みも可成り簡單で、形の上に大きな特徴も、香も感じられない。

この點、滿洲の影繪は、刻みも相當細かく、圓錐形で安定感もあり、刀の鋭さを思はせる感覺的な直線の交叉、その鋭さの中に軟かさを感じさせる面の線一面は全く周圍と感じを異にしてクッキリと區別され、帽子、衣服樣の複雜な彫の美しさに對して、面の單的に、感覺的にまとめ上げた彫の美しさは全く獨自のもので、簡潔頭腦腎感を美事に區別し表現してゐる。

背景、大道具、小道具

背景即ち家屋、岩石等、大道具即ち機械、樹木、佛像等、小道具即ち看板、提燈、食器、鳥籠或は農機道具等も總て人形と同じ樣式で製られ彩色され、獨得の裝飾化に眞彩を放つものである。

家屋の場合等は多く二分したものを、スクリーンの上で驟雨合はせる。こうした大きなものは頭が重い爲、柱だけではさゝえきれず、支え棒も不都合なので、直接スクリーンに特種な針で留める。

支那芝居では、こうした背景や大道具等は、例へば機をもつた馬にのつたことを式の約束で片付けてしまふ

が、影繪ではこれが觀物(みもの)で、障子の棧、欄間の彫り、はては屋根の瓦の一枚一枚迄、刻明に刻んだ綿爛さは絶讃に價する。前項「影繪の話の」中で、大香山の千手千眼佛に封じるくだりの異色ある場面の說明をしたが、大道具としても異色あるものなので荒れ狂ふ妖雲の種あかしをするが、丁度小田原提燈の紙の部分を皮に代え、之に種々の雲を思はせる穴を穿ち、彩色し、中に蠟燭(ローソク)を立て走馬燈の樣に廻轉させる。唯、これだけのものが、一寸想像もつかない異色ある變化と效果とを齎らすのである。

机や椅子はやゝ俯瞰的に型どられ、支え棒なくスクリーンに挿込まれる。

小道具には支え棒がついており、卓子に籠が置かれてゐる場合であれば、卓子に籠の小道具を重ね棒で支えると云ふ譯である。

影繪の場合、雲等も大道具の中かも知れぬと思ふが、この雲の飛來する樣は、演者が手でヒラ〳〵とかざして淡い影だけを映じさせるだけである。

幽靈を表示するのに普通の芝居では、白布を刻んだものを頭からたらすが影繪の場合は、布でも皮でもなく白い糸を束ねて先に針を付け、人形の頭部に挿し込んで用ひる。

脊景は佈景、大道具、小道具は大件、小件と呼ぶ。

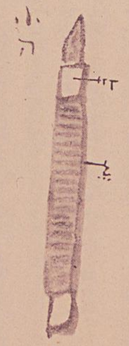
人形の造り方

驢馬の皮を薄く延ばし、紙樣にしたものを粉本によつて幅三分、長さ四寸ぐらいの小刀一本で細かく刻まれる。これは、竹片で兩方からはさみこみ、刀は僅か三分許り頭を出しその竹の上を糸でビッシリ卷いてある。さて刻んだものに簡單な泥繪具で彩色し、繪具によつて出來た皺を延ばす意味から、暫く適當に押をして平なものにする。次に、手の腹に桐油を付け、その平になつたものを兩手で丹念に油をすりこむ。そこで胴、手足の關節を糸で留め、首に手に針金を付け高粱の柄をすげ、これで一切の過程を終るのである。脊景、大道具、小道具、動物その他一切はこの方法、順序で造られる。

西派（羅北琢州）は牛皮が用ひられ桐油も塗らず形も遙かに大きいと云ふ。影繪も桐油を塗ると塗らないとでは、その味に大きな開きが出來やう。あのシットリとした持味は全く油のお蔭と思ふ。

驢皮の代りに羊皮を用ひる場合もあるが、羊皮は皺になり易い爲、餘り用ひない。

これを造りだす工師は、一座に一人づゝ專屬してゐるのが通例である。



座員の生活狀態

演技は少年期から五年十年年期を入れねばならぬ程技術を要するのに反して、收入が之にともなはない。

このことは、後繼者を得るのに非常に困難になつてゆき、引いては廢滅への大きな原因ともなるのである。

新京で樂亭影一座の收入をきくと、夏は十圓、冬は二十圓と云ふのが一日の收入で、これが一座九人十人の收入であるから樂ではない。その中から人形の補充もしてゆかねばならない。一座の組織は錢股と人股とに分れ、錢股は出資して配當を受け、人股は勞力を提供して配當を受ける。錢股が卽ち財東と云つて金主、人股は班主以下の座員で、利益配當は財東が一割五分なれば座員各自は一割づゝと云ふ樣である。

夏十圓冬二十圓と云ふ收入の開きは、冬は晝夜二回興行をやられることに因する。

樂亭影一座の人達は、妻子を連れて滿洲の各地を三年も四年も興行し歩いてゐる。寢泊りは茶莊の舞台裏とか若手等は客席の卓子を並べてその上ですませたりする。

これらの一座は代表的で、一年中各地を渡り歩いて夏冬共に收入を得てゐるが、群小一座は冬場は物持ちの祝儀不祝儀に呼ばれるのがせいぜいで、結局、夏の稼ぎで一年の生計を立てねばならない。

樂亭は一座の數も多く、代表的なのは北京、滿洲に出て專門にやられてゐるが、大概は後者で、冬はケチな內職でもして補ふ樣である。

北京邊りの一夏の稼ぎが一人百六・七十元と云ふが、夏の長い北京のこと故、結局、日割りにしたらさしたる收入ではない。

營口平康里の影繪は、入場料僅か十錢であつたのに支へ切れず潰れたが、この一座の生活はさだめし慘めであつたらう。

結局、金州吉慶班の樣な七十老の內職と云はふか道樂と言はふか、この程度でないと採算もとれまい。

清朝時代の演員が堂々たる邸宅をかまえ贅澤な生活を送つたのは全く昔の夢で、糊口をしのぐがやつと云ふのが現在の生活狀態である。

どんな所で演られるか

元來は民衆の藝術であるが、一時は貴族の支持を得、王宮に取上げられたこともある。こうした時はいづれ王宮內の大廣間邊りで王妃、女官の脂粉の香に醉ひながら勢一ぱいに演られたことであらふ。

再び民衆の手に歸してからは、豐作の時とか、農閑期を利用して村の有志の合同支出でやるとか、祝儀不祝儀に演られるとかで、場所は村落の空地とか、個人であれば中庭、街に出ては茶莊等である。

野外で演られる場合は前項に述べたから略すが茶莊の場合を少し述べてみる。

茶莊は茶社、茶館、茶園とも呼ばれ、講談や萬歲めいたものや影繪をやり木戸錢をとり更に茶を賣り瓜子兒（西瓜の種）を賣る。この場合の茶莊は客席と思へば間違ひなく、小屋の廣さも五六十人から百二、三十人程で、正面に野外の場合と同じ樣にスクリーンと樂屋が出來てゐるが、この場合は常設なので手綺麗に造り周圍を幾分飾つたりする。

前の方は池座と云つて圓卓がつき、後部は後排と稱して腰掛けだけ。從つて池座は料金も高い。大きい茶莊に

なると兩側に枡があり丸卓に椅子が四つ、名稱は箱池或は包箱と呼び一枡六十錢でばらに入れば一人二十錢、この値段は池座と同じで後排は十錢。但し之は新京の相場で、奉天では池座十五錢、後排十二錢と云ふ安さである。茶も新京六錢、奉天三錢、この外瓜子兒、菓子、サイダー等も賣られてゐる。

こゝでは電氣の光りで畫面の動きはないが、それでも味は充分感じられ、大きな茶碗にそゝがれた熱い支那茶を啜り、瓜子兒を噛みながら陶然と影をみ、唱片をきくことは、やはりたまらなく樂しいことである。

影繪の盛んな地方

もうすでに、盛んと云ふ言葉は無理で、比較的に言はれる言葉だが、地方ではやはり山海關、錦縣地方が盛んで、夏場等は素人が集まり、私藏の影繪を借り集め演られる程深く食ひ込んでゐる。

特に山海關の盛んな事は有名である。

この外、農安に一座が組織されてゐる。山城鎮、通遼、大寶等でも演られてゐるが、これはその土地のものでなく、樂亭影が巡業してゐるのである。

これ以外に、沿線都市の茶莊で僅かやられてゐるが、その茶莊名を記しておく。

一體奉天は影繪に付いては歴史的にも由緒深く、滿洲では一番盛んであり、此處だけは何時でもどこかの茶莊でやられ、確實にみることの出來る唯一の地である。

場所は全部城内で、小北門の新新茶社、西門裏の九滿茶社、四平街通の青久茶社、大西邊門外の代家茶莊等。

新京では三馬路の公餘茶莊が潰れて以來、大馬路の第一商場と北大街協和商場二階の協和遊藝茶社だけになつてゐる。協和遊藝茶社の茶主王葉官氏は樂亭の人で、樂亭影一座洪國昌班の財東であり樂亭影の支持者であるが、從つて一年中ほとんど樂亭影の看板を掲げてゐる。

哈爾濱では道外南十六道街安樂茶園がある。

支那で盛んな地方は、北京を中心に灤州、琢州、寶砥、南に下つて南影の發祥地と云はれる廣東省潮州、四川の成都、重慶、福建の福州等である。

影繪の將來

この稿は、多く樂亭影を引例したが、滿洲で滿人によつて組織された一座は、現在ではとんとみない。僅かに金州、農安或は奉天、山海關邊りにはあると思ふが、後は趣味道樂程度にやられるぐらいのものである。

そこで多く樂亭影を語つた譯であるが、然し元來滿洲影の一切は樂亭影の繼承で、多少唱の節に相違があるくらいで區別の必要はない。唯、樂亭影はその發祥地とも云はれ、代々演員一座を多く出しその意味で技術的に勝れ代表的とされてゐるので、形式上の相違なく同一に考へることは差しつかえない。

さてその代表的とされる樂亭影が、十錢二十錢の料金で糊口をしのいでゐるのである、到底滿洲の群小一座の

生計が成立つ譯がなく、結局營口のそれの如く廢滅をみるのである。

河北人に商人が多い。その商人が滿洲の都市に散在して居り、樂亭影の比較的頻繁にやられるのは全くさうした河北人の支持によるものである。彼等は瞼の底に殘る少年期の思出を求めにくるのであらふが、然し、すでに都會人となつた彼等の息子等は、このカビ臭ひ骨董品に振りかへる由もなく「影戲」とか「驢皮影兒」とか云ふた處で、一體なんのことかわかるものはほとんどない。

嘗ては農民の疲弊により農村を追はれ、都會に餘命を保つ影繪が、その支持者である老人を失つた時、再びシネマの光に、都會からも驅逐されねばならない。

影繪よ、何處へ行く。

最後的な望みは農村復活以外にはない。

農村にシネマの這入るには間があるし、又急激にさうした文化的なものをみせられるより影繪の方が、水準の低い農民にはより親しまれることだけは事實である。

農作に農閑期に、祝儀不祝儀に昔日の夢の復活を期待して止まない。

附 影繪人形玩具

子供の玩具として、影繪人形の模造品がある。材料は皮の代りに紙を用ひ、製作順序その他は一切本物と同じである。

皮のが一個七、八十錢から一圓、この紙のは二十五錢位。奉天の梁某は平常之を造り天后廟の祭やその他廟會、行事の折觸ひでゐる樣である。新京では小鐵道に住む楊小關が春の廟會、護國般若寺の戯佛會、南關の娘々廟會、關帝廟會或は吉野町の夜店にも進出してゐる。

その他、土產物屋には箱入りで賣られてゐる。之はやはり玩具程度で、濕氣に逢ふとクタ〳〵になつたり、いつか褪色したりするが、紙、布と電燈の間にかざしてみると可成りその感じも出し、中々美しい。

起原說の一つに最初は紙でこの樣に造られてゐたが、前述の樣な缺點にぶつかり、皮に代えられたと云ふ。

然し、適當な額に入れゝば立派な異色ある飾りともならふし、又マットに安平を用ひ緣に高粱でもかませ下げる樣にすれば、その滲んだ油の色がマット安平の色に溶け込んで美しく、美事な壁飾りともなる。又、壁ぢかに手足を自由に踊らせピンで止める壁飾りも面白く、走馬燈に利用すれば影戲的な味も得られるし、刺繍その他の圖案模樣に應用したら異色あるものにならふし、いづれにせよ內地土產には絕好のものと云へやう。

（執筆者　赤羽末吉）

奉天城内にある影繪芝居の家・久青茶社の入口

◇滿洲に對する
21・非能率的通關、活潑物等の御置
滿洲の資源を網羅せる
東京成ノ門 滿鐵資源課列所(電話番號)
東京 滿鐵資源課
大阪 鮮滿支案
同名 古屋 出張所
同數 駐在員事務所
同門司 鮮滿支案
同長崎 駐在員事務所
下關 鮮滿支案
新潟 鮮滿支案
小樽 鮮滿支案
◇寶庫滿洲の資源を網羅せる
發行所 滿鐵業務課
發行人 野間口英喜
編輯人 佐藤眞
印刷人 山田浩通
印刷所 東亞印刷株式會社
發行所 滿鐵業務課
編輯兼發行人 野間口英喜
印刷人 山田浩通
印刷所 東亞印刷株式會社
昭和十五年四月二十五日印刷
昭和十五年四月二十五日發行
(定價二十錢)
二〇、〇〇〇部

既刊
第一輯 光
第二輯 叢書
第三輯 北滿安鎭附近の魚釣
第四輯 北興寺の話
第五輯 滿洲花に於ける天主教の話
第六輯 哈爾濱に於ける露西亞の話
第七輯 滿洲江の魚
第八輯 那爾濱御製の話
第九輯 芝罘と盛京の話
第十輯 那爾濱附近の話
第十一輯 芝罘居留地の話
第十二輯 滿洲科學の話
第十三輯 滿洲の理想と現實の話

未
滿鐵鐵道總局